
IS-Link's

乙樽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS - Link's

【コード】

N1636T

【作者名】

乙樽

【あらすじ】

リンクス それは、世界で唯一のISを所持する傭兵。

プロローグ1（前書き）

これはAC×ISの二次創作小説の試作品です。

一部オリジナルパーツや、オリジナルのストーリー展開になりますが、そういうのを気にしないという方だけご覧になって下さい。
読んで気分を害した等と言う事は一切の責任を負いかねます。

プロローグ1

ドイツ「都市整備計画区」。

すぐ側に大きな河川が流れているこの町は今、戦場と化していた。機関銃が金切り声を上げ、戦車の主砲が咆哮する。

普通であるならば軍や組織等の多数の敵に向けられるのであるうそれらは、今はただ一人の存在だけに向けられていた。

「撃て！ まずはシールドを剥がすんだ！」

指揮官らしき男が声を張り上げて周囲に展開している部下達に指示を出す。

彼の部下達は指示に忠実に、絶える事が無いように思える攻撃を続けていた。

彼等が攻撃を始めてからかなりの時間が経過している。

にもかかわらず彼等は目の前の恐怖を排除する事が出来ずに居た。

それは攻撃を避けようとせず、反撃すらしてこない。

今は煙に隠れて姿は見えないが反撃に出られたら勝ち目は薄い……

いや無いと言っても過言では無い。

ならば今のうちに 指揮官がそう考えた矢先、数名の部下が倒れた。

「なっ!?!」

指揮官は物言わぬ肉塊となった部下達を見る。

部下達は全員が頭を撃ち抜かれており、頭の部分だけが吹き飛んでいた。

それは指揮官にデュラハンという死を宣告する妖精を連想させた。

指揮官は折れそうになる心を必死に奮い起たせて指揮を行う。

「諦めるな！ 相手だって人間なんだ！！」
仲間の死を目の当たりにした部下達は死んだ仲間の仇を討つ為に、
そして明確なものになった死から逃れる為に攻撃を続行する。

しかし、反撃を始めた敵によって一人、また一人と頭を撃ち抜かれていく。

攻撃が薄くなっていると同時に煙が晴れていき、彼等の死神が再び姿を表す。

漆黒の装甲を全身に纏ったその姿は戦乙女のように美しく、しかしその美しさは彼等の恐怖を更に引き立てた。

「インフィニット…ストラトス！」

隊長は歯が砕けてしまうかもしれない程強く歯を食いしばる。

インフィニット・ストラトス 通称IS。

それが彼等が今相手にしている敵の名前だった。それから一分も経たぬ内に、彼の部下達は一人残らず動かぬ肉塊と成り果てていた。

「この野郎おお！！」

独りとなった指揮官は手元に機関銃を引き寄せる。

銃口から大量の銃弾が飛び出し、死神へと殺到する。

しかし彼の最後の抵抗も空しく、弾丸は見えない壁に阻まれて相手を傷付ける事は無かった。

次の瞬間、彼の視界が黒一色に染まる。

額に金属の冷たさを感じた指揮官は銃口を突き付けられているのだと悟る。

「何なんだお前は…！！」

「傭兵」

死神は少女の声で答え、物言わぬ肉塊がまた一つ生まれた。

プロローグ2（前書き）

続きを書いてみました。

感想等を頂けたら幸いです。

プロローグ2

数時間後、軍によって行われる事後処理を少女は眺めていた。三編みに編まれた少女の白髪が風にたなびき生き物のように跳ねている。

「リンクス殿、お疲れ様でした」

眼帯をつけた銀髪の少女が彼女の背後に立って彼女に敬礼をする。リンクスと呼ばれた白髪の少女は振り向き、銀髪の少女を見て口元に笑みを浮かべる。

「ありがとう、ラウラ」

「しかし、相変わらずお見事ですな。

二十名近くにもなるテロリストをもの数分で殲滅するとは……」

先程の戦闘を見ていたラウラは賞賛の言葉をリンクスに送る。

ラウラの言葉を聞いたリンクスは自嘲気味に口元に笑みを浮かべる

「やめてくれ、私はただの人殺しだ」

ラウラは首を横に振り、

「そのような事はありません。私は貴女を尊敬しています」

姿勢を崩さずにそう言った。

彼女の視線を受けたリンクスは居心地が悪そうにありがとうと小さく言った。

そして、おもむろに立ち上がって三編みを揺らしながら歩き始める。それを見送るラウラはリンクスの背に敬礼をした。

「依頼は終わったよ」

「そうか…」

ラウラに見送られたリンクスは、携帯電話を使って自らの保護者に連絡をしていた。

耳に当てた携帯電話から保護者の安堵したような声が聞こえて来て、それはリンクスも安心させた。

「流石だな、秋葉」

「敵は強く無かったから当然だ」

先程リンクスと呼ばれた彼女は今は秋葉と呼ばれ、電話の相手に苦笑する。

「……なあ秋葉」

「なに？」

他愛もない世間話をしていると、ふと相手の声が神妙なものになり、秋葉は気持ち切り替える。

この保護者がこういう話し方をした時は大抵、とんでもない事になるのだ。

秋葉は警戒の意思を強めながら保護者の言葉の続きを待つ。

「お前に依頼をしたい」

保護者の言葉を聞き、秋葉は警戒を緩める。

依頼が保護者を通して自分のところへ来るのはいつもの事であるから、秋葉は自分の予想がとりあえず外れた事に安堵する。

しかしそれと同時に、恐らく彼女も自覚をしてはいないだろう物足りなさを覚えていた。

「分かった…依頼の内容は？」

秋葉はいつものように問い掛ける

「依頼主は私。そして依頼の内容は、
IS学園に入学し、卒業する事だ」

秋葉は依頼の内容に驚愕し、言葉を返さずただ立ち尽くしてしまっていた。

数秒後、出来るだけいつも通りを意識しながら秋葉は自らの保護者に問い掛ける。

「IS学園で今更私に何を学べと？」

IS学園とはISについて学習する、世界で唯一つの学校である。

しかしISの扱い方、知識、戦術e t c . . .。

秋葉は既にそれら全てを備えている。

そして、秋葉の備えたそれらは保護者に叩き込まれ、実戦を繰り返す事で秋葉自身の能力にしたものである。だから並の相手には決して遅れは取らない。

それは、もし相手が国家代表候補クラスであつたとしても同じ事である。

「確かにお前は私の最高傑作で、私が現役だつた頃に匹敵…いや、それ以上かもしれない」

ならば何故 秋葉はその言葉を胸の内で誰にも聞かれないように

呟いた。

彼女の保護者は秋葉のそんな心境を予測していたのか苦笑のため息を漏らしながら言葉を続ける。

「だがそれでも、学校にはお前の知らない事が沢山ある。悪い話では無いだろう？」

それに……」

そして保護者は秋葉にとって決定的とも言える言葉を投げ掛ける。

「これは正式な依頼だ。国際IS委員会も承認をしている」

「依頼ね……報酬は？」「卒業までの成績で判断をさせて貰う。

成績が良ければ良い程報酬は多くなり、悪ければ報酬は少なくなる。お前のやった事よっては特別報酬も有り得るから頑張れよ、リンクス」

リンクスの傭兵としての価値の一つに、正式な依頼は必ず受けるというものがある。

受けた依頼を完璧に達成させるとというのが秋葉のポリシーだ。

保護者はこれを利用して秋葉に依頼を受けさせた。

妥協をした秋葉は保護者に向かって最後の抵抗とも言える毒を吐く。

「分かった……いつか覚えてるよ、姉さん」

「楽しみにしておこう、秋葉……ああそれと、生活費やその他諸々は委員会が出してくれるらしい。思う存分使ってやれ」

「

そう言った電話の相手は、きつと悪魔のように笑っているに違いない。

そして、そう考えている自分も悪魔のように笑っているのだらう。

秋葉は口元が吊り上がるのを感じながら歩き始める。

目的地は日本、IS学園。

目的は完璧な学園生活を送る事。

プロローグ₃(前書き)

自分の筆の遅さに泣けます。

プロローグ3

「よく来てくれましたね、まあ座って下さい」

「……失礼します」

目の前の老人、轡木十蔵は兎の皮を被った獣である。

私が十蔵に抱いた第一印象はこれだった。

目の前でソファに座っているこの男は表面上は穏やかで親しみ易そうな人間に見える。自分に祖父という人間が居たのならばこのような人物が良い。そう思わせるような感じだ。

しかし彼は、隙あらば相手を飲み込む大食い獣なのだ。

恐らくこの老人の本性に気付いている人間は、この学園には数える程しか居ないだろう。

私は学園に関する説明を聞きながら彼についての考察をまとめた。

「リンクスさん」

「何です？」

不意に名前を呼ばれた私は、考察することを一旦止めて返事をする。

「今年は織斑一夏君も入学し、貴女と同じクラスになります。何かあった時はよろしくお願いしますね？」

十蔵は皺の刻まれた顔に柔和な笑みを浮かべた。要約すると、

「面倒事が起こったただじゃ済まさないぞ？ 何のためにお前を

この学校に入れたと思ってる」

という事だ。

因みにこれは、委員会が私への依頼を許可した理由でもある。

国連の一機関所属のIS操縦者である私には国籍が無い。各国は一夏を何としても自陣へ引き込みたい。

つまり国に縛られない私に、一夏を彼の身に降りかかる火の粉から守らせたなのだ。そして私は、今の話の中に出た織斑一夏の事を考える。

「（織斑一夏……懐かしい名だな）」

きつと彼は、幼い頃に僅かな時間しか共に過ごさなかった自分の名前も、顔も、覚えてはいないだろう。

私は覚えていたが、それは私がいつも忘れないでいたからに過ぎない。

「そうそう、君に会いたいという人が居るんですよ。よろしいかな？」

断る理由も無い。私は静かに「構わない」と答える。

十蔵は自分の座る椅子の後ろの扉に入室を許可する言葉を投げ掛けた。

扉が開かれ、部屋に淡い水色の髪の女子生徒が入って来る。

彼女は楽しそうな笑顔を浮かべ、気さくに片手を上げた。

「やあ秋葉ちゃん、久しぶり」

彼女は楽しくて仕方ないといった声音で、表情で、そう言った。

その女子生徒を見た私は、彼女から十蔵へ視線を移す。

「十蔵老人、私はこれで失礼する」

私は立ち上がり、足早にこの学園長室を去ろうとする。

「あん、秋葉ちゃんのいけず」

だが、扉の取っ手に手をかけていた私の身体は、女子生徒によって後ろから抱きしめられて動けなくなっていた。普段、滅多に焦る事のない私もこの時だけは焦っていた。色々な意味で。

「離せ楯無！　そして土に帰れ！！」

私は彼女に抵抗するが、上手い具合に身体をホールドされていて抜け出す事ができない。

「離さないし、土にも帰らないわよ」

私を抱きしめている少女　更織楯無は笑顔で秋葉に答える。

私は、必死な抵抗もあって何とか楯無の魔手から逃れ、距離を取る事が出来た。

「はあっ……はあっ……だから触るな！！」

秋葉は息を切らしながら先程自分に抱き着き、あまつさえ胸を揉むうとした女子生徒を睨みつける。

睨みつけられた女子生徒は何も言わずに笑顔で見つめ返してきた。

彼女の名前は更織楯無。

このIS学園の生徒会長で、腐れ縁の一つだ。

「秋葉ちゃんって久しぶりに会ったのに冷たいなあ……落ち込みそう」

楯無はわざとらしく肩を竦めて落ち込んでみせていた。

しょんぼりと、犬だったら尻尾と耳を垂らしているような姿だが、私にはそれが演技である事が分かっているので無視して見ないようにする。

「せつかく会いに来たのになぁ……」

どどん楯無の声が落ち込んでいるようなものになっていく。もしかしたら彼女は本当に私に会いに来たのかもしれないし、演技というのも私の考え過ぎかもしれない。そして、罪悪感に駆られた私は楯無の相手をしてやろうと思って振り向く。

「引つ掛かったなあ」

「……もうやだ」

しかしそこにあっただのは彼女の楽しそうな笑顔。楯無は落ち込んではいなかった。

私は楯無に、軽い殺意を覚えていた。

「もし、今この瞬間、楯無を襲うという依頼があったら私は喜んで受ける」

「え？ 秋葉ちゃんってば大胆ね……でも、秋葉ちゃんなら良いよ

……？」

「死ね」

楯無は、嫌よ と返してから秋葉の側を離れて十蔵の側へ移る。

私はため息を吐き、ソファに戻ってゆっくりと腰を下ろす。

「それで、楯無は何をしにきた？」

「なにも？」

即答した楯無に私は、再び軽い殺意を覚える。

何も用が無いなら来るな、そう心の中で呟きながら先ほどから笑みを崩さない、黒幕であろう人物に恨みをこめた視線を送る。

「まあまあリンクスさん。そんな目で見られても困ります」

十蔵は秋葉の視線を軽く受け流しながら笑顔で言う。

十蔵の反応に苛立ちを感じながらも私は話の続きを求めた。

「十蔵老人、彼女を呼んだ理由は何ですか？」

十蔵は「大したことではありません」と言って笑顔を向けてきた。

私は面倒ごとをさせられるような予感がして、微妙な気持ちになった。私は、面倒が嫌いなのだ。

十蔵はもったいぶるように息を吸う。

私は覚悟を決め、この話を早く終わらせてしまおうと考えていた。そしてようやく、十蔵は彼女に答える。

「学園内の案内を彼女にしてもらおうですよ」

本当に、大した事ではなかった。

IS学園は本当に広い。資料等からその広さを把握していたのだが、それを目の当たりすると、やはり圧倒されるものである。

「で、此処が第一アリーナなんだけど…」

楯無は今、アリーナを案内している。

アリーナは、秋葉達が今居る第一アリーナ以外にも幾つかあり、そしてアリーナごとに様々な状況を想定したフィールドになっている。第一アリーナはモンド・グロツソで使われるフィールドと同じ作りで、殆どの機体が同じだけの力を発揮出来る。

「あら……誰か使ってるのかしら？」

アリーナに入った楯無は首を傾げながら言った。

秋葉と楯無にはレーザーが放たれる音や火薬が炸裂する音が聞こえていた。恐らくは誰かが模擬戦をしているのだろう。

「楯無……」

「気になる？」

秋葉は楯無の言葉に頷く。それを見た楯無は笑顔を浮かべて観客席へ歩き始める。

秋葉は楯無の後をついていく。

秋葉の三編みは誰にも気付かれず、嬉しそうに揺れていた。

プロローグ4（前書き）

遅くなり申し訳ありません。

プロローグ 4

リヴァイヴが横に飛びながらマシンガンと双発式のレーザーを放つ。

リヴァイヴと相對している赤褐色のISは、それをレーザーにだけ注意して避けていく。

幾つかの弾丸がバリアーを突破し、赤褐色の装甲に当たって甲高い音を立てる。

しかし、装甲に傷一つ付かない。

避ける事しかない相手に苛立ちを覚えたのか、リヴァイヴの操縦者が口を開く。

「IS適性”D”の代表候補生……どんなものかと思えば、避けるだけか!!」

「……………」

リヴァイヴの操縦者は尊大な口調で、侮蔑を多分に含んだ言葉を投げ掛ける。

だが、赤褐色のISの操縦者はただ無言でそれを聞いていた。

無言を貫く相手に若干の怒りを覚えたリヴァイヴの操縦者は、大量のミサイルを放つ。

「っ……………!!」

赤褐色の操縦者は息を飲み、自らに襲い掛かるミサイル達を見据えた。

そして次の瞬間にはミサイルの迎撃をするために頭をフル回転させて方法を探る。

「避けられないわよ？」

リヴァイヴの操縦者は、たった今得た勝利への確信に口元を歪め、心の中で歓喜する。

だが次の瞬間、彼女の得た確信は呆気なく打ち崩される事になった。

ミサイルが一齐に爆発する。

だがそれは着弾によるものではない。

ミサイル達は、標的のシールドエネルギーをゼロにするべく殺到した瞬間、標的の前で爆発していた。リヴァイヴの操縦者はその原因を見逃してはいなかった。

「……………」

煙が晴れた場所で佇む赤褐色のISの操縦者が一発のミサイルをその腕に装備した”バズーカ”で撃ち落とし、ブラザーキルを引き起こしたのだ。

常人だったらやろうともしない行為。それを為した赤褐色の操縦者は、ふう……と息を吐きリヴァイヴの操縦者を見上げ、オープンチャネルで言葉を送る。

「行くぞ」

聞こえてきた声に、リヴァイヴの操縦者は首筋に鋭利な刃物を突き付けられたような感覚を覚えて身震いをする。

「今まで手を抜いてたとしても言うの!？」

激しい焦燥感に煽られたリヴァイヴの操縦者は、持っている全ての武装を出現させた。

「巧いな……」

秋葉は赤褐色のISの動きを見ながら言葉を漏らす。

赤褐色のISの機動は、決して複雑なものでは無い。

ただ瞬時加速や、機体を移動させて攻撃を避けているだけ。しかし的確なタイミング、的確な方向へ回避を行う事でうまくかわし、尚且つ次の動きへと繋げている。

だがそれ以上に恐ろしいのは、どれだけ攻撃を受けても動きが全くぶれない事だ。

「（あれを相手にするのは骨が折れるかもしれんな……）」

赤褐色のISの操縦者に対する秋葉の評価は高かった。

自分ならあの機体と、どのようにして戦うだろうか。

ガトリングによる面攻撃、ビーム兵器を利用した弾幕、ミサイルによる波状攻撃。

そして、近接戦闘。

だが近接戦闘の場合、ハズーカを至近距離で喰らうという危険もある。

ならば……

「決めるつもりかしら？」

リヴァイヴが大量の武装を出現させたのと同時に楯無が言葉を漏らした。

それを聞いた私は、思考を中断し、模擬戦を見る事に集中した。

「落ちろ！」

ミサイル、レーザー、マシンガン……それらが掛け声に合わせて一斉に放たれ、過剰過ぎる程の攻撃が放たれる。

回避は不可能　そう判断した赤褐色の操縦者は瞬間加速を使って致命傷になる攻撃だけを避けてながら、相手との距離を詰めていく。だんだんとシールドエネルギーが減って行くが彼女は気にしない。

彼女の頭にあるのは両手のバズーカを相手に直撃させる事だけ。

そう、それだけで彼女は勝てるのだから。

二機の距離が近くなり、射撃よりも格闘が有効な範囲になる。

リヴァイヴは長剣を出現させて赤褐色のIS切り掛かる。

しかし、彼女の武装選択は正しかったが、この場では間違いだつた。赤褐色のISは瞬間加速を応用した急旋回　通称、瞬間旋回イクニッションターンを使って長剣を避け、相手を正面に捉えたまま相手の背後を取つたのだ。その結果、リヴァイヴは攻撃後の無防備な背中を曝し、赤褐色のISはそこに照準を合わせるといふ位置どりになる。

「勝負あり、だな？」

そう言つた赤褐色の操縦者は連続してトリガーを引く。

強大な破壊力を持った砲弾が連続して放たれ、あつという間にリヴァイヴの機体のシールドエネルギーはゼロになる。

リヴァイヴは行動不能判定を受け、落下した。

「くっそお……！」

リヴァイヴの操縦者は負けた事による悔しさからか、地面に両手両

膝をつく。

「……」

赤褐色の操縦者は敗北した相手を一瞥した後何も言わず、相手に背を向けてその場を後にした。

プロローグ5（前書き）

連続更新です

プロローグ 5

「楯無、勝った方の名前を教えてください」

模擬戦を見終わった秋葉は隣の楯無に問いかける。

「彼女はローレン・フィッツジェラルド。専用IS”フィードバック”を所有してるアメリカの代表候補生ね」

「学年は？」

その問いに楯無はいつもの笑みに少しだけ苦笑を混ぜて答えた。

「秋葉ちゃんと同じ、一年生」

「成る程な……ん？ ちよつと待て」

秋葉は思考に入ろうと顔を下に向けるが、何かに気付いて顔を上げる。

彼女の目の前にいる楯無は表情を崩さずに、秋葉の言葉を待つ。

「何故、一年生が今アリーナにいるんだ？」

「やっぱり気付いちゃった？」 秋葉が気になったのはこれだった。入学式を数日後に控えてるとはいえ、新生が入アリーナを使用する事は入学式を

迎えるまで禁止されている。

しかし、あのローレンという一年生はアリーナを使用していた。どういう事だ？

秋葉は自分に問いかけながら考え、一つの結論に行き着く。

「まさか留年？ 自分に何か用ですか？」……君は？」

不意に背後から声をかけられた秋葉は、声のした方へ振り向く。そして、その声を発したであろう人物を見て問いかける。

「アメリカ所属、ローレン・フィッツジェラルド。国家代表候補生を名乗らせて貰っています」

話題に出ていた人物がいきなり現れた事に少しの驚きを覚えながら、目の前の口

ローレンという少女を観察する。

身長は自分より少し高い。髪は彼女のISと同じ赤褐色で、長く伸びたそれをう

なじの辺りで一つにまとめている。

切れ長の目から覗くグレーの双眸が落ち着きと同時に、触れた物を切ってしまう

ような冷たさを感じさせる。

鋭利なナイフのような少女だった。

「私達は貴方の模擬戦を見ていただけだけど」

「成る程。やはりそうでしたか……」

ローレンは秋葉の答えに納得したようなそぶりを見せながら、彼女をじっとみ

つめる。

何故自分が見つめられているのか分からない秋葉は楯無にアイコンタクトで理由

を尋ねるが、楯無も分からないようで返って来たのは胡散臭い笑顔だった。

「私の顔に虫でもついていたか？」

埒が開かないと感じた秋葉は、思い切ってローレンに問いかける。

秋葉を観察するような視線を送っていたローレンは少し間を置いてからようやく

口を開く。

「いえ……貴女はどこかの軍の関係者ですか？」

彼女の口から出たのはそんな質問だった。

「まあそんなところだ」

秋葉はそんな事か……と考えながらその問いに答える。

ローレンは質問を続けた。

「貴女の名前は？」

私はこの質問にどう答えたものか、と考えこむ。

正直に答えても良いのだが、そうすると自分の素性が相手にばれて

しまつかもしれない。いや、絶対にはれる。

正体を明かしても良いものか迷ったあげく、隠す必要もないので私は結局正体を明かす事にした。

「リンクス」といえば分かってもらえる？」

秋葉がそう答えるとローレンは目をスツと細める。彼女の身体が緊張しているのは誰が見ても明らかだった。

彼女の様子を警戒しているのだろうと秋葉はとらえ、これ以上の話は無用と判断してその場を後にしようと歩き出す。

楯無もそれに続き、その場にはローレン一人が残された。

- - -

一人になった観客席でローレンは肩の力を抜く。

ローレンが、観客席の楯無と秋葉に気付いたのは模擬戦の途中の事だった。

「何であの傭兵がこのIS学園に？」

溜息と同時に生まれた疑問をローレンは口にした。

一話（前書き）

連続更新はこれが最後です

一話

学園生活初日。

入学式を終えた秋葉は一年一組の教室でSHRが始まるのを待っていた。

教室内は無言。まるで戦場に移動するヘリのような緊張感がある。秋葉はその原因の人物に視線を向け、そしてすぐに目を閉じた。

「全員揃ってますねー。それじゃあSHRはじめますよー」

目を閉じている秋葉の耳に教師と思われる人物の声が届いた。

まるで年下のような声だと思った秋葉は、目を開いて黒板の前に立つ人物を見る。

身長は秋葉より少し小さく、大人としては小柄な部類に入る。ブカブカという程では無いのだが、サイズが微妙に合っていない服装が彼女の身長と相まって小ささを強調する。眼鏡も彼女のサイズに合っていないのか少しだけ傾いている。

「私は山田真耶。一組の副担任です」

山田真耶というらしいその教師は、自分の横にホログラムを出して自己紹介をする。秋葉はその名前を記憶すると、彼女の話を書く作業に戻る。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願ひしますね」

「はい」

挨拶や諸注意の話を一通り終えた山田先生は笑顔を浮かべて言う。
私はそれが自分達に投げ掛けられた言葉だと思ったので返事をした。
しかし他の生徒は誰も返事をせず、教室の中は緊張感に包まれたま
まだ。

変な形で目立ってしまったか？ と私は心の中で自問したが、周囲
の生徒の注意は先程からずっと、自分ではなく”彼”に向けられて
いるので大丈夫だった。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。
えっと、出席番号順で」

山田先生は一人しか反応が無かった為か、うろたえていた。

山田先生の言葉で他の生徒が出席番号順に自己紹介を始める。どう
やら話を聞いていないという訳ではないらしい。

自己紹介は順調に進むが、私の前の人物でその流れは止まった。

”彼”は意識が別のところに向いているのか席に座ったままで、立
ち上がる気配を見せない。

山田先生が慌てて”彼”に話し掛ける。

「織斑くん。織斑一夏くんっ」

「は、はいっ!?!」

案の定、彼は考え事に耽っていたらしく山田先生の二回目の呼び掛
けでようやく反応した。先程からクラスの女子の視線を一身に浴び
て居たから仕方の無い事かもしれないが、まあ自業自得という事か。
二人は何か話してるようだが、長くなりそうだったので私は自己紹
介の文を考える事に集中して話を聞き流す。

山田先生と幾つか言葉を交わした後、彼が後ろを向いたのを気配で
感じ取った。

自分の自己紹介の参考にする為に、耳を澄ます。

「えー……えつと、織斑一夏です。よろしく願いします」

女子が彼の言葉の続きを待っているのが分かる。

彼は呼吸を一度止め、息を吸い、そして口を開く。

女子達は、一字一句を聞き逃すまいとして気を引き締める。

教室内の緊張がピークに達する。

そして……

「以上です」

クラス内の緊張が一気に緩む。

拍子抜けした何人かがずっこけたらしく、後ろからは騒がしい音がしていた。

「あ、あのー……」

涙声になっている副担任の声が聞こえる。

私は内心で彼の自己紹介の短さに苦笑していた。

いきなり自分の趣味や自慢を始める人に比べたら好感を持てるが、短すぎるのはよくないと思う。

パアンツ！

そんな事を考えていると、胸がスカツとするような、気持ちの良い音が教室内に響き渡った事で私は目を開く。

「げえつ、関羽!？」

パアンツ！

織斑一夏の声に続いて、再度音が鳴った。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

低めの声が教室内に響き渡る。

「あ、織斑先生。もう会議はおわられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな」

その女性　織斑千冬は、先程とは打って変わって優しそうな声
で山田先生を労った。

「い、いえっ。副担任ですから、これくらいはしないと……」

労いの言葉が嬉しいのか、千冬に労われたのが嬉しいのか、あるいはその両方か、山田先生は嬉しそうな笑顔を浮かべた。

「諸君、私が担任の織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うこととは聞け。いいな」

織斑先生はクラス全員に向けた言葉を告げながら、一瞬、私を見た気がした。

「キヤーーーーー！」

千冬様、本物の千冬様よ！

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

「千冬様好きです！」

みんな若者してるなあ……。

クラスメート達の姿を見てみると、彼女達と自分が同年齢だという事に疑いを覚えてしまう。

これが普通の十五才の反応なのだろうか？

「いや、それは無いか……」

だが、その考えを私は否定する。

この熱狂っぷりは異常だと思う。

その証拠に、ポニーテールの女子生徒なんて興味なさそうにしている。

パンツッ！！

突如私の頭に衝撃が走った。

どうやら固いもので叩かれたらしい。

叩かれた部分にジンジンとした痛みを感じながら叩いた人物を見る。

「お前の番だ。早く自己紹介をしろ」

成る程、私の番だったのか。

ならば手っ取り早く済ませてしまおう。

「私は秋葉・オールドカースル。

仕事は傭兵、リンクスと言えはお分かり頂けるかと。それでは三年間、よろしくお願いします」

私は頭の中で組み立てておいた文章を一息で言い切った。つい先程まで騒がしかった教室の中は、水を打ったように静かになる。

数秒の静寂の後、どっと笑いが起こる。分かつてはいたがやはりこうなったか。

いきなり目の前の人間が、

”自分は世界的な歌手です”

とか言ったら、誰だってギャグだと思って笑うだろう。その有名人の顔が公表されて無いのなら尚更の事だ。

笑い続けるクラスメート達を見て織斑先生が何かを言おうとする。だが私はそれを目で制して、代わりに口を開く。

「信じる信じないは個人の自由だが、敢えて言わせて貰おうか」

全員に聞こえる様に私はよく通る声で言葉を紡ぐ。

クラスメート達の意識がこちらへ向いていた。

「私はこのクラスの誰よりも強い。以上」

教室内が沈黙に包まれる。

先程まで一夏に向けられていた視線は、全て私に向けられている。

だがそれは嘲笑や侮蔑といった、あまり向けられて嬉しいとは思えないものに由来する視線だ。

「それは、聞き捨てなりませんわね！」

パンツ！ と、大きな音を立てて机を叩き一人の女子生徒が立ち上がる。

その女子生徒は先程の私の発言が気に食わなかったらしく、声を荒げながら自分の席を離れて私の前まで歩み寄って来る。

「このわたくし、セシリア・オルコットを差し置いて最強ですって？」

セシリアというらしいその女子生徒は、私にぐいと顔を近づけて人差し指を突き付けてくる。

私の言葉が気に入らなかつたらしいが、事実を述べただけなのだからどうしようもない。

「最強はイギリスの国家代表候補生にして首席でIS学園に入学したこのセシリア・オルコットの他にはありませんわ」

うつとりとしたような表情を浮かべながらセシリアはまくし立てるように言葉を吐き出した。

成る程……彼女は国家代表候補生か。

「なら確かめる？」

「は？」

私の提案が意外らしく彼女は一瞬呆気に取られたようだ。

私は自分の口元が吊り上がるのを感じながら続ける。

「私の力を疑っているんでしょ？ ならば力を見せて、その現実を

直接、脳に叩き込んでやるぞ」

「……」

セシリアは私をじっと見つめたまま黙り込んだ。

セシリアが黙った事で私達の間にはばらく沈黙が流れ、セシリアがそれを破る。

「よろしくてよ。わたくしが浮かれた貴女を撃ち落として差し上げますわ」

セシリアは自分の勝利を確信しているらしく、自信に満ち溢れた笑みを浮かべた。

パンパンと手を叩く音がして、クラスの全員がその音の発生源である織斑先生を見る

「話が決まったようだな。勝負は三日後の放課後、第三アリーナで行う。秋葉とオルコットは用意をしておくように。それとオルコット」

織斑先生は私達の話をもとめ、セシリアを呼ぶ。

「なんででしょうか？」

セシリアは首を傾げながら織斑先生の呼び掛けに答える。

織斑先生はおもむろに出席簿を持った手を振りかぶり、

パンツ！

そして一気に振り下ろした。

「オルコット、お前は席に戻れ」

「は、はい……」

不意打ちだったらしく、軽く涙目になったセシリアは慌て席に戻る。その背中に同情を覚えたのは、私だけの秘密である。

二話（前書き）

一度、投稿する話を間違えてしまいました。
申し訳ありません。

一話

一時限目の終わりを告げるチャイムが鳴る。

秋葉は何をするでもなく次の授業が始まるのを待っていた。

今やクラスの生徒の注目は秋葉と一夏の二人に集約されている。

秋葉は自らを監視されるように見られる事に慣れていているが、視線を集めているもう一人の少年はそうではないらしい。

「あー……」

この学園唯一の男子である織斑一夏は、先ほどからずっと困ったような声を出している。

実際困ってるのだろう、彼は先程から何度も周りを見回していた。

廊下には在校生の殆どが押しかけ、廊下は鮫詰め状態になっている。

その光景は秋葉に、保護者から聞いたウーパールーパーという生き物の話を思い出させた。

女子生徒達の話し声から彼に近づこうと思っているのは明白である。しかし彼女達は一夏との距離を一定に保ったままお互いに牽制しあうだけで、誰も自分から話しかけようとしなない。

やられてる一夏にとっては居心地が悪い事この上ないだろう。

「織斑一夏、だったな……？」

「な、なんだ？」

このまま放置するのも気の毒だと思った秋葉は、彼の前まで行って話し掛けた。

一夏は話しかけられた事に少し驚きながらも、顔を上げて秋葉と向き合う。

私の顔を見た時、一夏は何かを思い出そうとしているような表情を浮かべていたが結局思い出せなかったらしく、そんな様子はすぐに消えた。

「私は秋葉・オールドカースル。事情があるからファミリーネームでは呼ばずに、名前で呼んで貰えると助かる」

「事情？ …… まあ、分かった。俺は織斑一夏。よろしくな」

一夏は秋葉の言った事情が気になるようなそぶりを見せるが、深入りはせずに納得した。秋葉としても、それはありがたい事だったので笑顔と一緒に感謝をした。

「ありがとう、一夏」

「ああ気にすんな」

彼は、秋葉の笑顔につられてか笑顔を返してそう言った。

「ところでさつきから気になってた事があるんだけど、良いか？」「構わない。私に答えられる範囲ならば答える」

秋葉の了承を得た一夏は問いかける。

「自己紹介の時に言っていた”リンクス”って何の事だ？」

「……………」

そんな当たり前のことを……と思った彼女だが、彼がつい最近まで一般人であったことを思い出して自省する。

一般人と同程度の知識しかない彼に、関係者の常識や価値観を押し付けるというのは些か傲慢が過ぎるだろう。

秋葉はそう考えていた。

「あー……答えづらい事だったか？」

「いや、大丈夫だ」

一夏は黙り、秋葉の言葉を待つ。

「ISに関連する軍事力はコントロールが可能であることをその第一の要因とし、一国のみが突出する事は、厳に慎まなければならない。

これは白騎士事件以降における世界の共通認識であり、結果として生まれたのがアラスカ条約だ。しかし、いつの時代においても進歩の土壌は競争であり、これを失う事は技術の停滞につながりかねない」

一夏は私の解説を黙って聞いている。

私は呼吸をしてから解説を続けた。

「この問題に対して世界が出した答えは”権力に侵されないIS学園”。そして”世界唯一のIS傭兵”だ。IS傭兵はリンクスと呼ばれ、国際IS委員会の組織の一つである”カレード”によって管理される。ああ因みに、依頼料金は依頼者が設定できるが、弾薬費の負担や追加報酬があったりすると、私としてはやる気が出る。…

…こんなところか」

「成る程……で、それがお前なのか」

「そついう事になるな」

秋葉は”教科書通り”の答えを一夏に与える。一夏はこれに納得し、そして秋葉がリンクスであるという事実を受け入れた。

彼はただ純粹に、目の前の傭兵だという少女に感心しながら少女の姿を見る。

軍服を模した改造制服に身を包み、かなりの長さをほこる雪のような白髪は三編みに編まれている。

瞳は血の様な鮮烈な赤色。燃え上がる炎のようでありながら氷のような冷たさを持ったそれは、一度見たら忘れられないだろう。

何が言いたいのかというところ、この瞬間、一夏は秋葉に見とれていた。

「どうした？」

「い、いや……なんでもない」

秋葉は一夏の様子に疑問を抱くが、「なんでもない」と彼の言葉を聞いて、なんでもないのだろうと結論付けて何も言わない事にした。

「……ちよつといいか」

秋葉が何か話題でも振ろうかと考えていると、不機嫌そうな声が秋葉と一夏の耳に届く。

二人はその声を発したのであろう人物の方をほぼ同時に見る。

「貴女は確か、篠之ノ箒だったか？」

「そうだ、オールドカースル。……一夏、ちよつと廊下まで来い」

「は！？ お、おい！ 襟を掴むな！！」

箒という少女は、名前を確かめた秋葉に肯定を返すと一夏の襟を掴んで強引に廊下まで引つ張っていった。

「忙しい奴だな……あいつは……」

二人を見送った秋葉は誰にも聞こえないように呟いた。

.....

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」

二時間目の後の休み時間に話し掛けるのが聞こえた。

話し掛けているのはセシリア・オルコット 確か、イギリスの国家代表候補生。

そのセシリアが一夏に話し掛けていた。セシリアは腰に手を当てて一夏を見下ろしている いや、見下している。

いかにも現代っ娘といったその姿に、私は内心で苦笑した。

いかにも、というのは今の世の中が女尊男卑だからだ。これはISを起動させられるのが女性しかいない事に起因する。

余談だが、私は保護者の影響を受けて実力主義なのでこの風潮は好きではない。

私は女だから損はしないのでどうでもいい事だとも思わないでもないが……。とにかく、こう言った光景は女尊男卑の世の中では見慣れたものなのだ。

しかし、織斑一夏は男でありながらISを起動させられる唯一の人間だ。

”ISを起動させられるのは女だけ” という大前提が成り立たないならば、女尊男卑は成立しなくなる。

世界各国が織斑一夏に注目しているのはそういう理由もあるのだ。彼を研究すれば男性の地位復活に繋がる、と。

そんな事を考えながら、私は二人の会話に聞き耳を立てていた。

「訊いてます？ お返事は？」

「あ、ああ。訊いてるけど……どうという用件だ？」

一夏が怪訝そうな声で返事をする。

だがその返事が気に入らなかつたらしいセシリアは大袈裟に驚いてみせ、信じられないとばかりに目をまるくする。

「まあ！ なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

一夏は微妙な表情を浮かべていた。恐らく、この手の輩が好きではないのだろう。

無論、私も好きではない。

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

一夏は結構、肝が据わっているらしい。

プライドの高い彼女なら、こんな事を言われて黙ってはいないだろう。出会って少ししか経ってないが断言出来る。

そしてその予想は的中した。

「わたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして、入試首席のこのわたくしを！？」

セシリアの口調は怒ってるというより、驚いているような感じだ。本当に自分の事を知って当然だと思っていたらしい。

「あ、質問いいか？」

一夏がセシリアに問い掛ける。

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「代表候補生って、何？」

私以外の聞き耳を立てていた女子がずっとこけた。私は先ほどの会話もあつたのでたいして驚かずに済んだ。

「あなたっ、本気でおっしゃってますの!？」

セシリアは凄い勢いでまくし立てる。

「おう。知らん」

だが、当の一夏は涼しい顔をしてそれを認めた。謙虚なのか演技なのかは分からないがここまで来ると清々しさを覚える。

セシリアも似たような心境らしく、米かみに人差し指を当ててブツブツと呟き始めた。

「信じられない。信じられませんわ。極東の島国というのは、こうまで未開の地なのかしら。常識ですわよ、常識。テレビが無いのかしら……」

重ねて言うが、彼はISを動かす前は織斑千冬の弟というだけの一般人だったのだ。

そんな彼に、IS関係者での常識は通じない。専門家の家族が、全て専門家ではないように。

「で、代表候補生って？」

「国家代表IS操縦者の、その候補生として選出されるエリート」

「ことですわ。……あなた、単語から想像したらわかるでしょう?」

「そう言われればそうだ」

「そう! エリートなのですわ!」

先ほどまで降下中だったセシリアのテンションは一気に回復する。彼女は一夏に人差し指を突きつけて言葉を続ける。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくする事だけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける?」

「そうか。それはラッキーだ」

「……馬鹿にしていますの?」

セシリアは一夏の返答に機嫌を損ねる。先ほど急上昇したテンションは再度急降下したようだ。

「大体、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。唯一男手ISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的差を感じさせるかと思っていましたけど期待はずれですね」

「俺に何かを期待されても困るんだが」

「ふん。まあでも? 私は優秀ですから、あなたのような人間にも優しくしてあげますわよ?」

セシリアは相変わらずの態度で言った。

「ISのことでわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

彼女は唯一という部分を強調して、誇るように続ける。

「入試つてあれか？　ISを動かして戦うやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ」

セシリアは得意げに鼻で笑う。

「あれ？　俺も倒したぞ、教官」

「は……？」

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「女子ではってオチじゃないのか？」

「更に厳密に言つと、女子で普通入試組では、だ」

私は二人の話に割り込んだ。普段だったらこんな誇るような事はしないのだが、セシリアの言葉を聞いて苛立っていたせいでやってしまった。

セシリアは話の途中で割り込まれた事と、割り込んできたのが私である事に顔をしかめる。だが、そんな事はすぐにどうでもよくなつたのか食いかかるように問いかけてきた。

「あ、あなたたちも教官を倒したと言っの！？」

「うん、まあ。　たぶん」

「そういう事になるな」

「たぶん！？　たぶんってどういう意味かしら！？」

ああ、セシリアよ。

興奮しすぎると早死にするぞ。原因は私達だが。

「それと、普通の入試組ってどういう意味かしら？」

セシリアがこっちを向いて問いかけてきた。

……問いかけるといふより詰問してきたといった方が正しいか。

「そのままの意味だ。私は普通の入試を受けていない」

「なら、あなたはどんな入試を受けたといふんですの!？」

それにしてもこのセシリアは興奮しすぎだ。

「二対一で、こちらの使用装備を一種に限定したハンディキャップ
マッチ」

「は？ そんな試験があるだなんて、わたくし聞いたことありませ
んわよ？」

この試験方法は、私のために用意された今回限りの試験だ。

そしてこの事実には隠されているわけではないが、他の生徒達には公
表されていない。

だから聞いたことがないに決まっているのだ。

「ああ……もう、どういふ事なんですの!？ 訳が分かりませんわ
!！」

「えーと、落ち着けよ。な？」

「そうだ。落ち着けセシリア・オルコット。その歳でハゲたくは無
いだろう?」

「一生ハゲたくありませんわ!！」

セシリアは私の言葉に顔を真っ赤にして怒る。

茹蛸みたいとかいっただら更に怒るのだろう。デビルフィッシュだし。

と、此処でチャームが鳴り、私達の会話は一先ずの終わりを告げ

る。

「っ……またあとで来ますわ！ 逃げないことね！ よくって!?!」

そう言いつと、セシリアは自分の席へと戻った。

三話（前書き）

連続更新

三話

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

三時間目は織斑先生の授業だった。

一、二時間目を担当した山田先生は端っこでノートを持っている。つまり、それほどにこの授業は重要という事だ。

私にとっては復習にしかならないだろうが……まあ、頑張るとしよう。

「ああ、その前に再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

授業に入ろうとしたとき、織斑先生は思い出したように言った。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……つまり、クラス長という事だ。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

クラス長か……特別報酬の対象ではないからやる気が起きない。

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

一人の女子が一夏を推薦した。

「私もそれが良いと思います！」

それに続くようにして他の女子も彼を推薦する。

本人は他人事のようにしているが、そんなに自信が有るのだろうか？

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？ 自薦他薦は問わないぞ」

「お、俺！？」

勢い良く椅子から立ち上がった彼は自分がクラス代表候補生にされてる事に今気付いたらしい。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？ いないなら無投票当選だぞ」

「ちよつ、ちよつと待った！ 俺はそんなのやらな」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

千冬先生の冷酷な言葉に当事者である一夏は当然のように反論するが、千冬先生の雰囲気におおされて一瞬たじろぐ。

彼が反論を続けようと何かを言いかけた時、甲高い声がそれを遮った。

やはりというべきか、その声の主は”セシリア・オルコット”だ。

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

最後のが本音なのだろう。

プライドや自尊心の塊というべき彼女がこの状況を認めるとは思え

ない。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サカスをする気は毛頭ございませんわ！！」

たいそうな物言いだ。彼女は以前、千冬先生が現時点での実力や格付けなど無意味だと言っていた事を覚えていないのだろうか？

確かに現時点では一夏とセシリアの実力にはかなりの差がある。しかし現時点ではの話であって、この先もそうだとは限らない。

一夏がセシリアを圧倒するようになるという可能性だって、十二分にあるのだ。もちろん私がセシリアに敗北する可能性も、一夏が私を越えるという可能性も充分にある。

だからこれだけは言える。今の立場に胡座をかいて座っているセシリアは、今のままだったらやがて挫折を味わうだろう、と。

「いいですか！？ クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

彼女は、最後まで言い切ると満足そうな表情をした。

そして何処からも反論が来なかったことに気をよくしたらしく、セシリアは毒を吐き続けた。

「それと秋葉さん、だったかしら？ あなたは先ほど、自分は最強だとおっしゃられたのに代表候補にならないとは、やはりその程度だったんですね？」

「全く……代表候補生がこれとは、イギリスも底が知れたものだな？」

「何ですって!?!」

分かりやすい、単純すぎる挑発。

子供じみたそれに応じる必要もないと思ったが、反論してしまう辺り私もまだ子供か。

だが、セシリアはそんな私の言葉に激昂し、その端正な顔を憤怒一色に染め上げる。

「いい度胸ですわね……三日後の決闘であなたには格の違いというものを見せて差し上げますわよ、偽者さん」

私は楽しみにしておこうとだけ返す事にして黙る。

「ああ……本当、嫌になりますわ！ わざわざIS学園に来たというのにこんな無礼な方が、二人も！！」

彼女はうんざりとしたように言いながら、大袈裟に腕を振る。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけない事自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で」

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

ついに我慢の限界が来たのか、永遠に続くかと思われたセシリアの言葉を一夏が中断させた。

「なっ……！！？」

予想外の、それも祖国を侮辱する言葉にセシリアは怒る。

「あっ、あっ、あなたねえ！ わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

怒りがピークに達したらしいセシリアは机を強く叩いた。

「決闘ですわ！！」

決闘、か。私にも勝負を申し込んでおいて、更に別の人間に決闘を申し込むとは随分と余裕なんだな。

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間遣い

いえ、奴隷にしますわよ」

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

「そう？ 何にせよ丁度良いですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの実力を示す絶好の機会が二度も与えられるなんて！！」

彼女の頭の中には、勝利を獲得し、喝采の中心に自分が居るビジョンでも浮かんでいるのだろう。

だが、それは私が三日後に空虚な妄想へと変えてみせる。

四話（前書き）

テスト期間突入しました。

四話

「居ましたわね。よく逃げなかったと褒めて差し上げますわ」

昼休み、何もせず席に座ったままでいるとセシリアに声を掛けられた。そういえば、先程またあとで来るとか言っていたな。彼女は一夏の席を見る。

だがその席に一夏の姿は無かった。

「もう一人は尻尾をまいて逃げたようですわね。このわたくしに恐れをなしたのでしょうか？」

「いや。多分忘れてるだけだと思っ」

「……………」

ふふん と得意げに鼻を鳴らすセシリアだったが、私の言葉を聞いた途端むすつとした表情になる。

とりあえず話を進める為に私から話す事にした。

「で……………何の用だ？」

「あなたにチャンス差し上げに来ましたわ」

チャンスと言ったセシリアは相変わらずの表情で尊大にふるまう。彼女の言うチャンスとはどうせ、自分に降参しろとかそういう類のものだろう。

今までもこういう態度をとる人間は数多く見てきた。そして、その度にそういった者に力を見せつけ、認識を改めさせてきた。今回もそうするつもりだ。

「どんなチャンスであつても私には不要だ」
「たいそうな自信ですわね」

お前に言われたくは無い。

そう心の中で呟いてから私は席を立つ。

「後悔することになりますわよ？」

「……期待させてもらうとしよう」

私は立ち去ろうとして、一ツ気になる事があつたのでセシリアに問い掛ける。

「そういえばセシリア。もう昼は食べたのか？」

「何故そんな事を聞きますの？」

私の質問に、彼女は怪訝そうな表情を浮かべた。

私は彼女を見つめ、少し間を置いてから気になったことを述べる。

「だつてお前、友達居ないだろう？」

「な、なななんですの貴女は!？」

私の言つた事が的中したのだろう。セシリアは顔を真っ赤にする。

「いや、ただ済んでないのなら一緒にどうかと思つただけだ。どうだ？」

「もうわたくしは昼食を済ませたので結構です！」

一人でする食事と良いのは非常に味気ないものだ。しかも学食で食事を済ますとなると、周りには数人で連れ合つて行くという人の方が多いのでは無いだろうか？

そんな場所に一人で食事をしに行くというのは、正直言って気が進まない。

だから誘ってみたのだが、セシリアはもう済ませてしまったらしい。

「そうか。では失礼する」

一人で食事となることは少々残念だが、私は彼女に背を向けて、教室を出た。

- - -

秋葉を見送ったセシリアは奇立ちを覚えていた。一夏という男子と秋葉とかいう女子が原因である。

セシリアはイギリスの国家代表候補生で、唯一人教官を倒し、首席で入学したエリートだと自負している。

それ故に自分も教官を倒したと言った織斑一夏と、それ以上の事を成し遂げたという秋葉・オールドカースル。

特に後者は自らをあの伝説的なIS傭兵である”リンクス”と言った。

実際のところ、これは紛れも無い事実なのだが、それを知らないには大言壮語な人間にしか見えなかった。

大体リンクスがこの学園に来る筈が無いのだ。

彼女は今や織斑千冬に並ぶ、完成した力の象徴なのだから。

だが、もしも、彼女が本物だったとしたら……

そこまで考えたセシリアはすぐに考えるのを止める。

こんな事を考えてもしかたないと考えたのだ。

例え彼女が、”あのリンクス”であっても、それは自分が勝てば良いだけの話。

リンクスがどれほどの実力を持っていたとしても、彼女は勝ちに行くだけだ。

”負けても仕方ない”と言われる事はセシリアにとって最大級の屈辱なのだから。

「どちらにしてもこの戦い、負けられませんか」

セシリアの拳は自然と握られ、勝利への決意を固めていた。

「でも……」

セシリアの表情がふつと緩まり、握られた拳も開かれる。

「次にお誘いがあったら、御一緒させてもらおうかしら……」

彼女は先程、秋葉に昼食に誘われた事を思い出しながらそう呟くのがあった。

- - -

教室を出た私は、昼食をとるために学食へと向かっていた。

普段なら自前で用意するのだが、今朝は事情により出来なかった。何を食べようか考えていると、いつのまにか食堂に到着していた。

入口から中を覗くと食堂の中に大きな人だかりが出来ている事に気付く。最初はただの混雑かと思ったが、すぐに違う事が分かった。

「また彼か……」

人だかりの中心人物となっている一夏を見て、私は思わずため息を吐いた。

私は人ごみを掻き分けて、食堂のカウンターへと向かう。これだけの人々が密集しているとこれだけでも一苦勞だ。

「カツカレーを一つ」

「はいはい、カツカレーね」

白い割烹着に身を包んだ従業員が威勢の良い声で答える。

私はようやく注文を終える事が出来たことに安心し、息を吐いて肩の力を抜いた。

「あんたはあの中に入らないのかい？」

その様子を見た従業員にカツを揚げながら問いかけられたので、彼女に意識を向けて答える。

「はい、私には意味がありませんから。そちらもこんな状態になつては、大変でしょう」

「まあねえ。でも、あんな風に騒げるのも若いうちだけだよ」

秋葉の言葉を聞くと彼女はカラカラと笑いながら懐かしそうに人だかりを作る女子生徒たちを見ていた。

「がんばりなよ一年生。今後のお得意様のために今回は大盛りにしてあげるといってあげる」

従業員の女性は気前よく、私の皿に盛大にカレーを盛り付けた。

私はその量に若干引いたが、礼を言ってからカツカレーの乗ったトレーを持つ。

空いているテーブルを探すが、何処にも無い。

しかも、まだ知り合いも少ないので相席するだけの関係に居る生徒も少ない。

私は少しの間学食の中を歩きながら、座れそうな席を探し、そして

ようやくそれが可能かもしれない人物を見付ける。
他に空いてる席も無かったので秋葉は彼女に相席をしてもいいかを
尋ねに行く事にした。

「相席、良いでしょうか？」

「……ああ、構わない」

問い掛けられた彼女は、驚愕の表情を浮かべてから、私の相席を了
承した。

私は彼女　織斑千冬と同じテーブルに座る。

「しかし、担任と同じ席に遠慮せずに座るとは、中々面白い事をす
る」

「他に席がありませんでした」

「なら仕方ないな」

それから二言三言の言葉をかわす。

簡単な会話が終わると、私は手を合わせてからスプーンでカツカレ
ーを口に運ぶ。

「……よく食べれるな」

千冬先生が私の皿に盛られたカツカレーの量を見て、軽く引きなが
らそう言った。

私は口の中にあつたカレーを飲み込み、水を一口飲む。

「学食の方に盛られました」

「成る程……彼女か」

私のカレーを持ったあの人はちょっとした有名人のようで、千冬先

生は誰の事ががすぐに分かったらしい。
その後、私がカツカレーを倒す作業をもくもくと続けた為、私達の間言葉はなくなった。

カツカレーをたいらげたのはそれから20分ほど経ってからで、授業の時間には間に合わなかった。
因みに、千冬先生は途中で

「遅れるなよ」

と言ってから先に行ってしまった。
情状酌量が働いたのか、今回の出席簿は前の時よりも痛くなかった。
次からは、あの学食の人には気をつけるとしよう。

五話（前書き）

うーん……小説を書くのってやっぱり難しい。

五話

「なあ……」

「……………」

「なあつて、いつまで怒ってるんだよ」

「……………怒ってなどいない」

嘘をつくなら、まずその表情と纏う雰囲気はどうにかしろ。

私は心の中で篠ノ之箒に言いながら朝食をとる。

私の目の前では織斑一夏が不機嫌な篠ノ之箒に話しかけるといっ構図が出来ていた。聞いた話では彼と彼女は同室らしく、多分その関係で昨日喧嘩でもしたのだろう。

因みに私の部屋は二人部屋に一人というものだった。一人というのは他人に気遣わずに過ごす事が出来て気楽でいい。

「顔が不機嫌そうじゃん」

「生まれつきだ」

目の前の二人はまだ先ほどのような会話を続けていた。

何故私がこの二人と一緒に朝食を取っているのかという数分前、

『なあ秋葉。ここ良いか？』

と、箒を連れた一夏に問いかけられ、私の居たテーブルは狙ったように誰も座っていなかったし、断る必要も無かったので私が承諾したからだ。

そして二人は私の近くの席に座ったのだが、その時からずっと一夏が話しかけ、篠ノ之箒が不機嫌そうに返すといった状態が続いていた。

一夏はちらに助けを求めるような視線を送ってくるが、その度に篠ノ之箒の不機嫌オーラが増大している事に気付くべきだ。そういえば、先程一夏が私に話しかけた時も彼の後ろに居た篠ノ之箒の視線がキツくなつたような気がする。

まあ、そういう事なのだろう。

そういう事とはつまり、

篠ノ之箒は織斑一夏に惚れているという事だ。生憎、肝心の思い人の方はその気持ちに全く気付いていないようだ。だからと言って彼に気のない私を、親の仇でも見るような目で見てもらっては困る。

これが恋する乙女というやつなのだろうか？ 私には全く分からない。

なにせよ、これから苦勞するであろう篠ノ之箒に心の中で合掌。

「お、織斑くん、隣いいかなっ？」

「へ？」

声が聞こえて来た方向に視線を向けると、三名の女子生徒が一夏に話しかけていた。

「ああ、別に良いけど」

話しかけた一名は安堵の表情を、残り二名はお互いに顔を見合わせながらガッツポーズをしていた。

「ああ、つ、私も早く声かけておけばよかった……」

「まだ、まだ二日目。大丈夫、まだ焦る段階じゃないわ」

「昨日のうちに部屋に押しかけた子もいるって話だよー」

「なんですって!?!」

悔しがらる女子や、気合を入れ直している女子のざわめきが聞こえる。相変わらず凄まじい人気だな、一夏は。

了承を得た女子三名は、テーブルに腰を下ろす。

私達の居た六人掛けのテーブルは、私、一夏、篠ノ之箒の他に三名を新たに迎えた事で満席になった。

私は三名の中に知った顔を見つけたので会釈をしておく。相手も私に気付いてたようで笑顔で手を振っていた。

「あれ？ 布仏さんとオールドカースルさんって知り合いだったの？」

「うん、そうだよー」

「ああ、他人を通しての知り合いだがな。あと私の事は秋葉で良い」

私と布仏本音のやり取りに気付いた女子一名が聞いててきた。

私と本音は普段通りの様子でそれを肯定する。

「それでき、秋葉さんって本当にあの”リンクス”なの？」

「うん、そうだよー」

その女子生徒は興味津々といった様子で、声を潜めて聞いてくる。

私は肯定しようとするが、それよりも先に本音が答えていた。

「……………ええー……………っ!？」

質問をした女子生徒の叫び声が食堂中に響き渡り、一夏に向けられていた視線が彼女に向けられる。

彼女はすぐに自分に視線が向けられている事に気付いて、慌てて声のポリリウムを落とす。

「え、えっと本当の本当にリンクス？」

「あ、ああ……………」

声をひそめ、顔を近付けてすごい勢いで聞いてくる女子生徒に私は若干引きながら頷いた。

「嘘でしょ……」

女子生徒は信じられないといった様子で呟く。
ところが、これは事実なので認めてくれ。
私は時間を見て、席から立ち上がった。これ以上ゆっくりする時間はなさそうだった。

「そういう事だ。私は行く」

本音は手を振りながら私を見送っていた。

「あつきーまたねー」

「秋葉だ」

-
-
-

「ねえねえ織斑くんさあ！」

「はいはい、質問しつもん！」

「今日のお昼ヒマ？ 放課後ヒマ？ 夜ヒマ？」

二人の先生が教室を出ると同時に大勢の女子が一夏へ押し寄せた。彼女達の顔にはそろいもそろって、何か、鬼気迫るものがあった。真後ろの席なので少々鬱陶しいが、話を聞けるのでよしとする。

「いや、一度に訊かれても」

彼の視線が何かを捉える。その先に居たのは整理券（有料）を配っている女子だった。

だが、この様子では整理券はしつかりと機能していないのではないか？

「千冬お姉様って自宅ではどんな感じなの!？」

「案外だらしな」

パンツ!!

一夏がいらんことを言おうとした瞬間、あの胸がスカツとする音が聞こえた。

「休み時間は終わりだ。散れ」

素晴らしいタイミング。千冬先生が一夏の背後　つまりは私の目の前に立ち、出席簿を持っていた。

「ところで織斑、お前のISだが準備まで時間が掛かる」

「へ?」

「予備機がない。だから学園で専用機を用意するそつだ」

「???」

千冬先生。それでは説明が足りないだろう。

私は一夏の頭の上に大量のクエスチョンマークが浮かんでいるのを幻視した。

「せ、専用機!?!　一年の、しかもこの時期に!?!」

当人よりも先にクラスメート達が千冬先生の言葉に反応していた。

「つまりそれって政府からの支援が出てるって事で……」

「ああ。いいなあ……。私も早く専用機欲しいなあ」

クラス内のざわめきは拡大していく。

だがそれでも訳が分からない様子の一夏に、千冬先生はため息を吐きながら呟く。

「教科書六ページ。音読しろ」

「え、えーと……。『現在、幅広く国家・企業に技術提供が行われているISですが、その中心たるコアを作る技術は一切開示されていません。』……」

千冬先生の言葉に従って一夏が音読を始めた。

教室内は先程までのざわめきが嘘だったかのように静まり返る。

「『現在世界中にあるISは468機、そのうち467機のコアは篠ノ之博士が作成したもので、これらは完全なブラックボックスと化しており、現状でコア作成技術を持つ人間は、博士以外知られていません。しかし博士はコアを一定数以上作る事を拒絶しており、各国家・企業・組織・機関では、それぞれ割り振られたコアを使用して研究・開発・訓練を行っています。またコアを取引することはアラスカ条約第七項に抵触し、全ての状況下で禁止されています』……」

「つまりはそういうことだ。本来なら、IS専用機は国家あるいは企業に所属する人間しか与えられない。が、お前の場合は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意されることになった。理解できたか？」

「ん？ 残り1機のコアは誰が作ったんだ？」

「それは不明だ」

「不明……？」

「ああ」

一夏は千冬先生の返答に不安を抱いたらしく、そんな表情を浮かべていた。

人は自らの立つ場所の脆さを知った時、とてつもなく不安になるものだ。

世界の常識を一変させた存在　　I S。

そのI Sに必要な物であるコア。

このコアを誰か分からない存在が作り出せるという事実。

これはつまり、核兵器をも上回る”世界最強の兵器”の数や状態を完全に把握出来ない事と同義であり、現在アラスカ条約によって何とか安定を保っている世界情勢にとっては脅威でしかない。

「所詮はイレギュラー……という事か」

私の呟きは誰にも聞かれる事は無く、教室の喧騒に飲まれていった。

六話（前書き）

間があいてしまいましたが、完結までには行くつもりです。

六話

秋葉とセシリアの試合当日。

第三アリーナのAピットで秋葉は一人、目を閉じていた。

ピット内の照明は全て切られ、中は真つ暗闇である。

これは秋葉の希望によるものだ。秋葉にとって暗い場所は尤も身近な場所であり、彼女はそういった場所にいると安堵する。

そのため平時の時はよく暗くした部屋に居たりするのだが、今回はここでそれを行っていた。よく暗闇を怖いと言う人が居るが、秋葉にはそれが全く理解出来ない。

暗闇は全てを優しく包み込んでくれる。彼女にとって、日の光は眩しすぎた。

秋葉はうなじに触れる。

普段は三編みに隠れて見えない　三編みで隠しているそこには機械が埋め込まれていた。

A・M・S　Allegory-Manipulate-System。

脊髄や延髄を経て脳と統合制御体が直接データのやりとりをするマシンの生体制御システム。人の脳に直接電気信号を送り込むため、常人なら数分で発狂しかねないほどの高いストレスが発生する。

負荷、適正。そして道徳性から禁忌とされる技術。人類史における負の遺産。

それが秋葉のうなじに埋め込まれた機械の正体である。

秋葉の機体「ストレイド」は、AMSを使わなくても、機能を一部制限してだが戦う事は可能である。だが今回の戦いは周囲に、自分を認識させる為の戦いであり、秋葉は全力を出す事を決めていた。

秋葉は自身の中にイメージを浮かべ、それと同時に秋葉の身体は光

に包まれる。

体が包まれていく感覚。

皮膜装甲展開完了。

重力の鎖から解き放たれる感覚。
推進機作動異常無し。

右手に程よい重み。

051ANNR展開。

左手に確かな存在感。

063ANAR展開。

周囲の全てを知覚。

ハイパーセンサー最適化完了。

頭に数多の情報が流れ込んで来る感覚。

AMS接続完了。

「行ける」という確信
全行程完了。

『秋葉さん、準備はいいですか？』

突如聞こえてきた声。それと同時に灯るピット内の照明。

山田先生の顔が秋葉の目の前のディスプレイに映し出されていた。

「いけます」

それに対する秋葉の返答、肯定。

山田先生は頷く。それ以降、彼女達の間言葉は交わされなくなる。

秋葉 いや、リンクスは自身の機体を加速させ、ピットから出撃した。

.....

「貴女のような方が専用機持ちでしたとは……わたくし、とても驚きましたわ」

「それは結構」

秋葉はセシリアの投げかけた皮肉に短く答える。が、セシリアはそれが気に入らなかつたようで不快さに顔をしかめた。

「良いですね。あなたには少しばかりの情けをかけてさしあげようかと思つてましたけど……」

セシリアは目を閉じて深呼吸をする。

次の瞬間、彼女の周りの空気が引き締まるのを秋葉は感じた。

「止めにしますわ!!」

<敵IS射撃態勢に移行>

ディスプレイに表示されるよりも前に秋葉の身体は動いていた。秋葉は右方向へ、短時間に高出力のブーストを噴射する技術 クイツクブーストと呼ばれる技術を行い、その場から離れる。

セシリアのISは狙撃特化。

それに対して、秋葉は高機動戦をしかける。

「くっ……ちょこまかと目障りですわ!」

まともに定まらない狙いと、掠りもしない攻撃。それらに痺れをきらしたセシリアは、自らの持つ最大の武装を解き放った。

「ティアーズ!!」

四機のビットが放たれ、それらがレーザーの嵐を生み出す。

セシリアはビット達に秋葉の死角を狙わせるが、この時彼女は一つ気付いていないことがあった。

それは、ISには死角が存在しないという事。

ISのハイパーセンサーは正しく運用すれば周囲360度を知覚する事が可能なものである。

だが人は、通常一つの方向にしか意識を向けられない。だから、360度の知覚が可能なISに搭乗しても死角というものが生まれてしまう。

これは人である以上仕方のない事であり、当たり前前の事だった。

人間というソフトにとって、ISというハードは高性能過ぎるのだから。

だがしかし、これは克服出来ない弱点ではない。

秋葉以外にもこれを可能にしている人物は居る。

秋葉は自分以外にもこの芸当が可能な現役の人物を五人知っていた。

ローゼンタールの破壊天使”ジェラルド・ジエンドリン”。

GAの英雄”ローディー”。

インテリオルの災厄”ウィン・D・ファンション”。

BFFの女王”リリウム・ウォルコット”。

そして現時点での実質的な世界最強、オーメルサイエンスの切り札。 ”オツツダルヴァ”。

彼女達は全員が企業所属であり国家代表ではないが、現時点においての世界最強メンバーと言っても過言ではない。

余談だが、秋葉はの中で唯一ローディーとだけは会っていない。というよりも、彼女は実在が疑われている伝説のような存在であり、秋葉もあまり詳しくはなかった。

大分話がそれてしまったが、結論だけを述べると秋葉に死角は無い。そのためセシリアの放ったブルー・ティアーズは、全て秋葉に捕捉されている。

捕捉し、攻撃のタイミングも視認している以上は回避する事は容易い。

それを証明するかのように秋葉は青いレーザーを全てかわしていく。自分の攻撃が完全回避されるという事は、セシリアにとって初めての事だった。

そして、それをセシリアが許容できる筈もなかった。

「いい加減、当たりなさい!！」

ビットを自分の方に後退させ、更にスターライトMk-?も利用してのレーザー連続発射。

だがそれすらも秋葉は避ける。

決して足を止めず、セシリアの予測射撃を行ったさらに先へとISを動かす。

その動きには一切の無駄が無く、観客たちはまるで秋葉が鳥になったかのような印象を覚えた。

彼女が空を掛けるたびに、観客たちは空を舞う黒い羽を幻視する。

観客達の中には彼女に見とれているものさえも出てきた。

「……」

秋葉は自らの速度を更に引き上げる。

常人ならば目を回してしまうような速度を正確に制御し、アリーナの空を駆け抜けた。

セシリアはエネルギー補充の為にBTを戻す。

秋葉 被弾ゼロ。

観客達は彼女の技量の高さにはざわめき立つ。

攻守が転換し、秋葉が攻勢に回る。

スターライトMk-?の射撃を回避しながら両手のライフルのトリガーを引いて弾幕を形成する。

セシリアは数発を掠りながらもこれを逃れ、スターライトMk-?による射撃を続行。

秋葉はアリーナの淵を沿うように飛びながらこれ避ける。

青い閃光が彼女を射抜こうとするが、掠る事すら許されずにアリーナの地面か外壁を焦がす。

ライフルがブルー・ティアーズに有効打とならないのを悟ると、秋葉はライフルでの射撃を中断。

背部に装備した、二基の分裂ミサイル”SALINE05”を射撃体勢に移行させる。

ロックオン、ミサイル発射。

一連の作業の後に秋葉はそのまま分裂ミサイルを放つが、セシリアは分裂前にビットに撃ち落とさせる。

レーザーによって迎撃されたミサイルが爆発し、それによって煙が発生した。

次の瞬間、煙を割って黒い影が踊り出る。

「なっ!?!」

黒い影 秋葉の伸ばした手は、反応が間に合わなかったセシリアの右手を掴む。

それと同時に秋葉は右手にマシンガン MOTORCOBRAを
展開。

秋葉はそのままセシリアを引き寄せてMOTORCOBRAの銃口
を目の前に突き付け、零距离でマガジン分の弾丸を叩き込む。

「つう……」

ISのシールドによって肉体的なダメージはゼロだが、銃弾によつ
てシールドはガリガリと削られていく。

「離れなさい!!」

セシリアは秋葉の頭上に展開したビットにレーザーを撃たせる。

秋葉は後方にクイックブーストを行って射線から外れ、ビットの追
撃をかわし始める。

「やります、わね……」

セシリアは息を切らしながら言う。

先程の攻撃によるダメージはおよそ200。

もう100程削る予定だったのだが、予想よりもセシリアが怯まな
かったので出来なかった。秋葉は思っていたよりも肝が据わってい
た事も含めて、その評価を若干上方修正する。

「さて、これで終わりか？ セシリア」

予想よりも耐えた

だが、追撃のチャンスであることは間違いがない。

秋葉はこの機を逃さずに接近。

左手に展開したレーザーブレード、02-DRAGONS LAY

ERを振りかぶる。

「くっ……!!」

セシリアがうめくような声を上げると同時に腰背部のパーツが動き、その砲口が秋葉へと向く。

秋葉は反射的に後方への瞬間加速を行って距離を取る。

ブルー・ティアーズからミサイルビットが放たれ、ストレイドを追尾し始める。

「……………」

秋葉はミサイルビットの軌道の向きと垂直になるようにクイックブーストを使い、反転しようとするミサイルを051ANNRで撃ち落とす。

「ミサイル程度で落とせるとでも思っていたか？」

「それでも、距離はとれましたわ。そう……これはわたくしの距離……!!」

セシリアの言葉と同時に、再びBTが放たれる。

それを見た秋葉は口元に僅かな笑みを浮かべた。

……………

モニタールーム。

大型のディスプレイに一箇所に滞空して狙撃を始めたセシリアと、レーザーの雨をかいくぐる秋葉の姿が映し出されていた。

秋葉は被弾数ゼロを堅持してその技量の高さを相手と観客達に知らしめる。

それを見ている千冬がため息を吐いた。

「どうしたんです？」

「いや。随分と楽しそうに飛ぶものだと、そう思ったただけだ」

同僚を心配した真耶に返ってきたのはそんな言葉だった。

同じくモニタールームに居る真耶はそれを聞いて再びモニターに視線を戻し、ああ成る程と頷いた。

真耶は秋葉の機動の端々に、生き生きとした様子を垣間見た。

高度な慣性制御とブーストによって空を自在に駆け抜ける秋葉の姿は、真剣にやっているというよりも楽しんでいるというように見えた。

「あいつはISを使う事が好きだ。だからだろうな」

「ああ、確かに」

丁度、モニターに秋葉がレーザーを回避しているのが映る。

秋葉とストレイドは派手に炎を噴いてクイックブーストを行い、ブルー・ティアーズの攻撃を避ける。

「まあ観てる方に自分が何者かを理解させるためだろうが、まったく……」

千冬は苦笑交じりに呟く。

「織斑先生、一つよろしいですか？」

そんなとき、彼女に真耶が問いかけた。

「なんだ？」

「何故、秋葉さんがリンクスだという事を生徒達には教えなかったんですか？ 織斑先生がそう言えば誰もが事実と認識してくれると

思っているが」

その問いに、戦闘から目を離さずに千冬は答える。

「なに。百聞は一見にしかずという諺があるだろう？ それに……」

「それに？」

「いや、なんでもない。忘れる」

真耶は、千冬の態度に不信感を覚えながらもモニターへと意識を戻す。

モニターの中では、秋葉が左手のライフルを格納してレーザーブレードを展開していた。

.....

一閃 秋葉はミサイルビットをブレードで両断。ミサイルとしての機能を失ったそれは何も無い場所で爆ぜる。

直後、秋葉に向けた再びレーザーの雨が降り始めた。

秋葉はジグザグに跳びながら光線を避け、ハイパーセンサーでビットの位置を全て捉えると意識を集中して軌道を予測。

右手のアサルトライフルで四機あるビットのうち一機を破壊する。

「えっ!？」

セシリア、決して少なくはない驚き。

投げられた小石に小石を投げて当てるかのような秋葉の所業は続き、一機また一機と着実にビットが破壊されていく。

「そんな……、っ!!!」

ビットが全て破壊された時、驚愕していたセシリアはストレイドの接近を許してしまう。

その左手に装備されたレーザーブレードが唸りを上げ、ブルー・テイアーズに迫る。

咄嗟にセシリアは後退してそれをかわす。

一瞬前までセシリアの居た場所を、緋色の光刃が通り過ぎた。

「イ、インターセプター!!」

セシリアは慌て唯一つの近接装備を展開して対応するが、元より接近戦の得意でない彼女に勝ち目は無かった。

一回打ち合えばでナイフを持つ手を弾かれ、二回目には武装を手から弾き飛ばされる。

セシリアに残された武装はスターライトMk-?のみ。

だが、接近戦でスナイパーライフルは頼りにならない。

セシリアは打開策を探るが、そうしている間にも秋葉のレーザーブレードが振るわれる。

誰もが戦いは終わったと思った。

だが次の瞬間、セシリアは秋葉を思いつきり蹴る。

「く、うつ!?!」

予想の遙か斜め上を行った攻撃方法に、秋葉はこの戦闘で初めてダメージを受けて姿勢を崩す。

「ふふん……油断大敵、ですわよ!!」

その隙にセシリアは後退してライフルで攻撃を行う。

数発被弾し、決して少なくないダメージを受けた秋葉だが、その機動に乱れは無かった。

「その通りだな、さあ続きだ!!」

セシリアは後退をしながら接近しようとする秋葉を狙撃する。秋葉が出ようとするとタイミングを的確に読んで叩く。

それは、セシリアがこの短時間の間に成長をしている証拠だったが、秋葉もだからと言って価値を譲るほど優しくはない。

「ストレイド!!」

ストレイドはパートナーの要求に忠実に従う。

背部の非固定浮遊部位がスライドし、大量の推進ユニットが頭を覗かせる。

《OVERED BOOST》

秋葉の目の前に表示された文字列は、準備完了を意味していた。

背部、肩部、腰部、脚部。それぞれに配置された推進ユニット、およそ40基。

一斉に炎が点り、4枚の翼のような独特の炎を形作って爆発的な速度を秋葉に与える。

「なっ、速」

セシリアの視界から秋葉が消え、凄まじい衝撃が彼女を襲った。

気付いた時にはすでに秋葉が彼女の背後に居て、ブルー・ティアーズのシールドエネルギーがゼロになっていた。

試合終了を告げるブザーが鳴り響き、アナウンスが勝者を告げる。

『試合終了。勝者 秋葉・オールドカーズル』

七話（前書き）

レポート、テストetc……。

遅れてごめんなさい。

待ってくれてた方が居たりしたら嬉しいです。

七話

戦闘後。

誰も居ない更衣室に腰を下ろして、ぬるめのドリンクを飲んでると、唐突にため息が口から零れ出た。

戦闘の後はいつもこんな感じだ。

自分の中の何かが抜け出ていく感覚、そして感じる虚無感。

私はゆっくりとした動作で立ち上がり、更衣室を出ようとする。

「秋葉さん！」

そんな時、私を呼び止める声があったは振り向き、声の発生元である人物を見る。

「セシリアか。何の用だ、私は眠いんだが」

「相変わらずの態度ですね……まあそれは置いておくとして」

本当に何の用だろうか。私は思わず首を傾げる。

セシリアは息を吸って、吐いてから綺麗な所作で頭を下げた。

「あの時、貴女の事を嗤って申し訳ありませんでした」

ここまで来て漸く、私はセシリアが自分のところに来た理由を理解した。

頭を下げたままにいるセシリアの姿を見て思考する。

彼女はこうして謝っているが、そもそも自分はそこまで気にしていない。

むしろ、自分に嫌悪をすら抱いている。

他人が自分を認めようとしらないのはいつもの事で、だから自分とい

う存在を力尽くで認めさせたに過ぎないのだ。
結局、自分は力でしか”秋葉”という人間を回りに認知させられないという。

私は、そんな私をどうしようもないくらいに情けないと思うと同時に、嫌だった。

「秋葉さん？　どうかなさいました？」

そんな事を考えていたせいでセシリアへの返事を忘れていた。

私は怪訝そうな表情を浮かべているセシリアに急いで答える事にした。

「私はもう気にしていない。だからセシリアも気にするな」

私がそう返答するとセシリアは再び礼を言った。

律儀なものだと思いながら、私はその場を去ろうとして

「ああ、まだ話は終わってませんのよ？」

またセシリアに呼び止められた。

「手短かに頼む」

「ええ、はい。クラス代表の件ですわ。わたくしに勝ったという事は貴女が一組で一番強いということ」

「そうだろうが、一夏が……」

秋葉の言葉を気にせずセシリアは話を続ける。

「ですからあなたにクラス代表の権利を譲渡いたしますわ」

「だから一夏……」

「そして、貴女をわたくしのライバルにしてあげますわ！」

セシリアはどん、と胸を張って秋葉の答えを待っている。その目が
”さあ、感謝なさい！”といってるよう若干引いてしまった。

一度ため息を吐いてからセシリアに返事をする。

「そついうのは一夏に勝ってから言え」

「イチカ？ ああ、あんな男にわたくしが負けるはずありませんわ」

確かにその通りだが、と思う。

しかし、それと同時にセシリアのこの慢心が彼女自身の首を絞める
のではないかという予感もしていた。

秋葉はそれもまあいいかと思ひ、何も言わない事にした。

「もう用は無いな？」

「ええ、もうありませんわ。ではまた明日、秋葉さん」

「ああ。また明日、セシリア」

私は自室に向けて歩きだす。

今度は引き止める声はかけられず、まっすぐ帰る事が出来た。

八話（前書き）

連続投稿

八話

「私が訓練を？」

「ああ、頼む！！」

セシリアとの決闘の翌日、朝食の席で一夏が私にそう言ってきた。どうするべきだろうか。

引き受けても良いのだが、確か篠ノ之箒が教官役をやっているという話を耳にした。

彼女の許可を得てから引き受けるのが筋というものだろう。

多分彼女は認めないだろうが、それでもアドバイスくらいはしてやるでしょう。

頼って来た人に対して何もしないのは、私の信条に反する。

「篠ノ之箒。どうする？」

私と一夏の話が無言で聞いていた篠ノ之箒に尋ねる。だが彼女の事だから承諾するというのは無いだろう。

「ああ、箒なら大丈夫だ。これは昨日、箒から言った事だしな」

「……………」

私が彼女の許可を取ろうとすると一夏がそう口を挟んできた。

彼曰く、これは箒から言い出した事らしいがどうい事なのだろうか。

「昨日、何があったんだ？」

考えても話が全く見えて来なかった私は、一夏にそう尋ねる事にし

た。

「ああ、昨日な……」

一夏が語り始める。

私はそれを黙って聞いた。

夜の1025号室。

一夏と箒はそれぞれのベッドに座り、向かい合って話をしていた。そして話は、他愛もない世間話から今日あった秋葉とセシリアの戦闘になった。

「いやー、それにしても今日の秋葉は凄かったな」

「ああ、そうだな……」

一夏は戦闘の光景を思い出しながら言い、箒も同じように思っていた為頷いた。

だが、その時、箒が少しだけ眉をひそめたのに一夏は気づかない。

「やっぱり、ああいうのって憧れるよな」

「……そうだな」

気づかない一夏はどんどん秋葉を褒める。

ここで少し考えて欲しい。

好きな人が自分の目の前で楽しそうに異性の話をするのは、誰にとっても少なからず気持ちの良いものではないと思う。

言うまでもない事だが、箒は一夏が好きだ。

だから一夏が秋葉の話をする度に、彼女が不機嫌になっていくのは当然の事だった。

「箒も見てただろ？ あの時の秋葉の……」
「そんなに、あいつの事が良いのなら……」
「ん？」

最初は、一夏だから仕方ないと自分に言い聞かせていた箒だったが、ついに箒の我慢の限界が来た。

「そんなにあいつが良いのなら、あいつから教われば良いだろう！」
「！」

「何で怒ってんだよ!？」

箒が吐き捨てるようにそう言う。

一夏は箒の怒ってる理由がまるで分からなかった。

「って、事があってな……」

一夏は昨日あった事を語り終えた。
これ、どう考えても悪いのは一夏ではないのか？
鈍感だという事はこの数日で分かったが、度が過ぎている気がする。

「で、駄目か？」

一夏が何も言わない私に問い掛けてくる。
先程引き受けても良いとは思ったが、此処で引き受けたら箒が可哀相だ。

それに、彼女は東博士の妹でもある。
大恩ある東博士の妹を、私のせいで傷付けてしまうのは避けたい。

「構わないが……篠ノ之箒、お前も手伝ってくれ」

「な、私がか!?!」

「ああ」

驚きの表情を浮かべた箒に私は頷く。

「り、理由を聞こうか」

予想通り、食いついてきた。

彼女は一夏が別の人の教えを乞うのは不満だったのだろう。

「理由は、素人に銃の使い方や軌道を先読みする技術はそれなり以上無い。中・遠距離戦闘は彼女の土俵。故に、教えた所で効果は無い。だから一夏には、彼女が苦手とする近接格闘戦をやらせる」

事実、セシリアの射撃能力や軌道を先読みする技術はそれなり以上には高い。

そんな相手に素人に毛が生えた程度で戦いを挑んだところで勝ち目は万に一つも無い。

「しかし私は、近接格闘は好きだが、殆どが経験によるものであるから、到底教えられるものではない。だからだ、篠ノ之箒、お前が剣の使い方や間合いの詰め方、呼吸等を叩き込んでくれ」
「成る程な……」

今考えた即席の理由だが、利にはかなっているはずだ。

篠ノ之箒も断る必要が無いだろうし、我ながら上手く理由を作れたと思う。

「そういう理由ならば仕方ない。うむ、引き受けてやるとしよう」

彼女は少し安心したような口調でそう言った。

しかし、彼女も少しは自分の気持ちをしっかりと言うようにならないと駄目だろう。

「夏は”超”が付くほどの鈍感だから、気持ちを明確に伝えないとそれを理解をしないだろう。」

「二人ともありがとうな」

「べ、別に私は秋葉に頼まれたからやるだけだ」

篝の返答を聞くと、一夏は笑顔を浮かべる。

「二人とも仲良いんだな」

笑顔を浮かべたまま嬉しそうにそう言った一夏に、思わず内心で苦笑してしまう。

別に今のは篠ノ之箒が私と仲が良いという訳ではなく、単なる照れ隠しだと思うのだが。

「……はあ」「」

私と篠ノ之箒のため息が重なった。

九話（前書き）

テスト、レポートでかなりの期間を空けてしまいました。
待っててくださった方。もしいたら、申し訳ありません

九話

「は、あつ……」

剣道場で一人の男子が息を切らす。

彼の額には汗が大きな珠を形作り、その端正な顔立ちを濡らす。

疲労困憊、消耗過剰。中学の三年間、帰宅部に所属した事はこれ程までに影響が出てしまうのか。

情けない

彼の心中にある思いは、ただその一つだけだった。

こんな事になるなら筋トレやジョギングでもしておけば良かった。

彼はそんな後悔を抱きながら柄を握り直し、再び構える。

左手に 中でも、その中指と薬指、そして小指で竹刀を支える感覚。右手はあくまでも添えるだけ。

剣道の基本に従って、思い描ける限り、最高の姿をつくりだす。

「もう一本！」

俺が構え直すと、箒が凜とした声でそう言った。

体力的には厳しいのだろうが、気力は十分。身体に鞭打って動かす事に難はない。

次こそは、一本を取ってみせる！

「やあーっ！ー！」

身体の内には抑え込めなくなった気力を声に変えて放出し、それを力として竹刀を振るう。

剣道場に、竹刀が防具を叩く乾いた音が鳴り響いた。

私は剣道場で正座をし、目の前で行われている相掛かり稽古を見つめる。

一夏の方は相当消耗しているのだろう、動きの端々に疲れが滲み出ている。

そろそろ止めさせた方が良いか。

一夏の様子を見てみると分かるのだが、気力はあっても身体がそれに追いついていない。

稽古は今の限界まで身体を酷使して、少しずつそれを引き上げていくものだ。

人の身体は、限界を超えた酷使に耐えられる程、頑丈に出来てはいないのだから。

「よし、そこまで」

筭が再び一本を取ったのを見た私は、二人に聞こえるように声を出して、稽古を終わらせるように言う。

「終わったー……」

二人は動きを止め、それと同時に一夏は後ろに倒れ込んだ。

「しっかし、本当に意味があるのか？」

休憩後の反省会で、私は訝しむような言葉を口に出すのは一夏。彼の言いたいことは分かる。要するに、剣道の修練とISの操縦技術の向上に繋がりを見つけることが出来ないというところだろう。大抵の人間の引っかかる事だが、彼も例にたがわずこの思考に囚われているようだ。ならば、教えておく必要があるだろう。

「一夏、ISというパスワードを操縦するのは誰だ？」

「ISを使う人だろ？」

「成程、そういう事か……」

何を当たり前の事を、という風に返す一夏。

その隣では一夏の答えを聞いた筈が、私の言いたいことを理解しづらいらしく納得の言葉を呟いていた。

だが肝心の一夏は理解をしていないようなので、てっとり早く結論を話してやることにする。

「つまり、自分の肉体の延長線上にあるものを操縦するのに、操縦者が弱くては話にならないだろう？」

「なるほど！」

「……本当に理解したか？」

「おう、5割くらい理解した！」

うん、5割くらいで何故そんなに自信満々なのかという疑問は伏せておこう。

「ならば言い方を変えよう。世界最強のブリュンヒルデたる織斑先生は、生身でも異様に強い。これでどうだ？」

「おお……たぶん10割理解したぜ」

成程、一夏はIS関連の話をするときは織斑先生で例えると理解しやすいのか。

……別に、シスコンなどとは一かけらも思っていない。決して、思っただけでもない。

「ってことは秋葉も強いのか？」

と、そんなことを思っていたら一夏にそう尋ねられた。

「それは、私も気になるな」

今まで黙って会話を聞いていた篤もそう言ってきた。

ふむ……まあ先程の道理で行くのなら確かに私も生身で強い事になる。

一夏がリンクス 秋葉という”私”を強いと思っている事に僅かながらの苦笑を浮かべながら、私は問いかける。

「ならば見せてやるか……篤、相手を頼めるか？」

「良いだろう。私が相手をするのが筋だろうしな」

「ただし、私は剣道じゃないが、それでもいいな？」

「ああ、構わない」

剣道以外の技巧を使用する許可を得た。まあそもそも、私は剣道の戦い方が苦手なのだが。

「じゃあ始めようか」

私は竹刀を片手に立ち上がる。

防具は着けない。何故なら不要だから。

それを見て箒は、少しばかり怪訝そうな、何か言いたそうな表情を浮かべていたが、これが私の戦い方なのだから仕方ないだろう？

「さて、始めるぞ？」

「何時でも来い……」

お互いに竹刀を構える。ざっと見てみたが、流石は全国大会覇者というべきか箒の構えには隙が無い。

次の瞬間、箒の纏う空気が攻めに転じる。

「……っ！」

竹刀が霞んだかと思えば次の瞬間には振り下ろされていた。

剣道では素振りをするときに1拍子で一連の動作を済ませるとよく言われるのだが、彼女の場合は半拍子程度だ。

この振りの速さは、拳動を先んじられても先手をとることすなわち後の先を可能とする。

これが彼女が全国最強剣士たる所以の一つだろう。だがしかし、それだけでは甘い。

私は竹刀を斜に構えて箒の一刀を受け止め、軽く力をそらして受け流す。

「何っ！？」

私の動作と共に箒が驚愕の声を漏らしていた。

先手を取り、常人には追いつかぬ絶対的な速度を以て放った一刀をこつとも簡単に受け流すのが信じられないだろう。

彼女の動揺は、竹刀越しても手に取るようにわかった。

だがそれは、私くらいのものなら当然の事。この程度の速度ならば私達には止まって見える。故に対応は容易。

これくらいで驚かれては、見せる方としても少々困るのだ。

「ふ……！」

竹刀で空気を切り裂き、高い音を立てさせながら箒へと振るう。

決まるか　いや決まらないだろう。

私の振るった竹刀は、箒が咄嗟に引き戻した竹刀で防がれていた。

「ああ……確かにお前ならば見慣れているだろうな」

その体制のまま、鏑迫り合いからはかけ離れた鬨ぎ合いを演じる。

だがそれも長くは続かない。殆ど同時に後退、お互いに考える事は同じなようだった。

「……」

お互いに無言で、再度竹刀を構える。

この時すでに、箒も剣道として戦う事を止めていた。

私の使う技が殺人の為の術であるという事に気付いたのだろう。

剣道は活人剣と言われる通り、人を生かす剣である。

殺人対活人。どのようにして相手を斃すか、どのようにして相手に打ち勝つか。

この二つは似ているようでその存在は対極に位置すると言っても過言ではない。

そんなものがぶつかればその結果は無傷で活人剣が勝つか、相手を斃して殺人剣が勝つの二つしかない。

そしてどちらの答えにたどり着くかの確率は、前者が1厘で後者が

9割9分9厘といったところだろうか。
少なくとも私が負ける事はよほどの事が無い限りあり得ない。
筭もそれを、この一合で理解したのだろう。

彼女も私を殺しに来ている。

数月前まで頻繁に味わっていた、この戦場に似た殺伐とした空気を感じながら、私は型を無視した……しかし自らの最も動きやすい構えを。筭は竹刀を中段に置き、剣先を私に向けて正眼の構えをとっていた。

「「やあ つ！！」」

数秒間に渡る、視線での牽制の後、剣道場の床を同時に蹴った。私達は一瞬でお互いの竹刀の範囲内に入り、同時に竹刀を振り下ろす。

そして

「っ……」
「やはりか……」

お互いの獲物は、衝突の衝撃に耐え切れずに中ほどからぱっくりと割れていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1636t/>

IS-Link's

2011年11月29日02時45分発行